

9月26日 学校説明会

2冊の本と1つの新聞記事から考える高志中等教育学校の適性検査対策
～ 高志中等教育学校にふさわしい生徒になるために ～

本日は、ご多用のところお運びいただき、誠にありがとうございます。

当校、校長の上野昌弘です。

本日は、市内の多くの小学校が運動会等の行事があるとのことで、いつもよりずいぶん少ない参加となっておりますので、いつも以上に、中身の濃いお話をしたいと思います。

本日は、受検相談会ですので、学校の教育活動などの話よりも、どういう生徒を求めているか、そのような生徒になるにはどうしたらよいか、そして、入学適性検査をクリアするためには、何が必要かということをお話します。

限られた時間ですが、2冊の本と今朝の新聞記事一つをもとに、お話します。

まず、最初に今朝の新潟日報に掲載されていた記事についてです。

『『～活』世代を超え浸透』という見出しで、国語世論調査の結果が報道されていました。今回の調査で特に取り上げられていたのは「敷居が高い」「浮足立つ」という慣用句の本来の意味をとらえている人が3割に届かなかったということです。

「敷居が高い」は、本来、「相手に不義理をして行きにくい」という意味ですが、今回の調査では、半数以上の人々が、「高級すぎたり上品すぎたりして入りにくい」という意味でとらえているという結果でした。

さて。当校の適性検査では、このような「本来の意味は？」という知識を問うことは基本的にしません。もし、これをもとに問うのならば、このような状況を示し、「このことについてあなたの考えを300字以内でまとめなさい」というような出題になるでしょう。ただし、単なる意見を書かせるのではなく、「言葉は時代とともに変わるものである」という意見や、「言葉は文化であるから正しく使い守っていく必要がある」という意見、その他、このことにかかわる様々な意見や立場、データを資料として複数示し、それらをどのように活用して自分の考えをまとめ、相手にわかりやすく伝える、ということを求めると思います。

「正解のない問いに向き合うこと」「新しい価値を創造すること」のためには、このように様々な考えやデータを正確、的確に取扱い、そして、自分の考えをきちんと述べることができる力が必要だからです。

次に、瀧本哲史『ミライの授業』という本のお話をします。

この本の著者である瀧本さんは、投資家であり、京都大学客員准教授として、学生たちにこれからの教育、これからの時代を創る力について指導されていました。残念ながら、47歳という若さでお亡くなりになりましたが、彼の生き方、残したメッセージについては、この8月にNHKで特集も組まれました。

この本は、14歳の若者向けに、講義をするように語りかけるように書かれています。小学生の皆さんでも十分に理解できる内容だと思いますので、ぜひ、読んでみてください。当校が目指す方向があますところなく語られています。

さて、彼は、「学校で何を学ぶのか？」と問いかけます。そして、ハリーポッターならば、「魔法」と答えるだろう。では、現実の学校では？と続け、「みなさんは、ハリーポッターと同じ、『魔法』を学んでいるのです。」といいます。

そして、江戸時代の人々が、現代の日本に来たら、この世界はどのような世界として映るかという問いかけます。馬の代わりに鉄の塊が走り、テレビやスマホなど、目の前にいない人の様子が映ったり、話せたりする不思議、空に鉄の鳥が飛んでいる様子にきっと驚くだろう、妖術の国に来たと思うに違いないといいます。そして、この「魔法」を実現にしたのが、「技術」の力であるといいます。

「技術」の進歩は、社会を変えていきます。そこでどういうことが起きるのか？

例えば、以前、電車の改札には、駅員さんがいて、切符の一枚一枚をチェックし、パンチで穴をあけていました。確認しましたという証拠ですね。しかし、やがて改札は自動化され、切符を入れると自動的にパンチされて出てくるというようになりました。そして、現在では、スイカやスマホによって、タッチするだけで確認がされるようになっています。便利になりました。しかしながら、それは、同時に、切符を切る駅員さんの仕事がなくなるということでもあります。素早く正確に切符を切ることのできた熟練した駅員さんの技術や技も必要なくなるということです。

もう一つ、こうした変化は、国境を越えて進んでいます。例えば、iphoneはどこの製品か、ということです。もちろん、アメリカのApple社の製品ですが、その部品は、世界中から集められ、台湾の会社が組み立てを担当し、中国の工場で組み立てている。いうなれば、「メイド・イン・世界」というものである。こんなふうに世界が変わってきた理由は二つある。一つは、どこでも同じ品質のものが作れるようになってきたこと。そして、もう一つは、同じものができるのならば、人件費の安いところで作ったほうがよいということだ。では、一番安く作ってくれるのはどこか？

答えは、ロボットである。

近年、AIが発達することによって、消えていく職業が話題になっています。AIに仕事を奪われるのではという不安を抱える人たちもいます。この現在進行形の未来に、みなさんはどう立ち向かっていくのか、その答えは誰も知りません。ミライを生きる、ミライを創るみなさんには、どんな力が必要なのでしょう？

瀧本さんは、こんな問いを投げかけています。

当校の適性検査では、一問一答のような○×問題はほとんどでません。ある状況を理解し、複数の資料やデータを関連づけて、自分の考えを述べるような出題が多い傾向にあります。その理由が、まさに、瀧本さんのいう「正解のない未来を切り拓く力」を学び、身に付けてほしいからです。

最後に、『デザインから考える障害者福祉 ミシンと砂時計』という本についてお話をします。

この本の著者は、新潟青陵大学福祉心理学部社会福祉学科の海老田大五朗先生です。この本は、先日、当校の土曜活用でご講義いただいた際に「短い時間で伝えきれなかったのも、ぜひ、興味あるみなさんに読んでもらってください」と図書館にご寄贈くださいました。

先生は、「道具をデザインすることで可能になることがある」、「デザインという観点から障害者福祉を考える」という講義をしてくださいました。

この本の冒頭、日本理化学工業という、日本でのチョコレートのトップシェアメーカーで、時計の読めない知的障がいのある社員でも、正確な時間を求められるミキサー操作ができるようなデザインが紹介されています。それは、「砂時計」を利用するということです。これなら、時計が読めなくても、砂が落ちたらスイッチを切るという作業はできます。

「デザイン」というと、ファッションやかっこよさというイメージを持つ人も多いと思います。しかしながら、先生は、「ユニバーサルデザイン」という言葉もあるように、障がいのある人も働くことのできる、力を発揮することができる社会のための「デザイン」について、誰もが語り、誰もがそうしたデザイナーになれることを目指して研究されています。

さて、みなさん、多くの人は、障がいに限らず、「自分にはできない、無理」と思い、あきらめたり、別の人に頼んだりすることが多くあると思います。また、誰かに対して「どうせあの人にはできない」と決めつけたりすることはないでしょうか？

「どうしたらできるようになるか？」という視点の大切さを「デザイン」という形でこの本は教えてくれます。

当校の適性検査では、具体的な討論や検討の場面が示され、その中で様々な立場や考えの人が異なる意見を出してきます。それらを他の資料やデータを見つつ、どうすれば互いに納得のいく方策が作れるか、互いの考えのよさを活かせるかなどを考えることが求められます。

当校の適性検査は、単なる知識を問う問題ではありません。学校で学んだ知識、日々の生活の中で得た知識を基に、今、そして、これからの社会、世界を、よりよくデザインしていく力を学んでいく素地があるかどうかを適性としてみたいと思っています。

学校の勉強はもちろんですが、新聞やニュース、マンガや映画や読書など、幅広く学び、興味関心のアンテナを広げ、誰かと語り合い、自分の考えを確かに伝えることのできるよう心掛けてほしいと思います。

